

## ダライ・ラマと日蓮

塚本三郎

チベット問題で、中国に対して、北京オリンピック開催の資格があるのか、という抗議が相次ぎ、世界各地で聖火リレーに対して大混乱となっている。

チベット民族の信仰と、言論の自由を認めよと主張している、ダライ・ラマ十四世が、テレビに放映されている姿を見ると、日蓮が蒙古来襲に、警世の運動を興した、約七百年前の日本を省みる。二人の宿命と、時代的背景が、余りにも似ている。

### 神、仏は邪道を許さない

現代と鎌倉時代とは、同一に比べられないし、また、ダライ・ラマと日蓮を同列に置くことに違和感がないわけではない。ダライ・ラマ十四世は、チベットに於ける活仏であり、かつ国家に於ける、政教一致の国の元首である。

日蓮は本朝沙門、即ち日本に於ける一仏弟子と宣言しているように、政治権力も地位もない、仏教者に徹している。しかし、「人心の動向と国家権力の善悪」に対して天が裁きを下す、との仏説を信じている点で、置かれた状況が余りにも似ている。

天の怒り少なからず、と観た日蓮在世中と、ダライ・ラマの政権への警告と似ている。

一・日蓮上人も、ダライ・ラマ十四世も、釈迦の教えを信じた熱心な**仏教者**である。

二・日蓮が立正安国論で警告した、**侵略を迫る国は、今日の中国**であった。

ダライ・ラマを中心とする、チベットの**仏教徒**を弾圧しているのも**中国**である。

三・日蓮も、ダライ・ラマも、抑圧する政治権力、即ち**国家権力**の在り方を問うている。

四・仏の使と自負し、必死の信仰に、神仏は彼等を見捨てない。——**天の裁き**が下る。日蓮が約七五十年前、「立正安国論」を著して、時の執権北条幕府に献言したのは。日本を襲って止まない天災（七難）のうち、既に六難が襲ったからである。

地震、非時風雨、旱魃、飢饉、悪疫流行、自壊叛逆（内乱）、と經典の文中、金光明経、仁王経、大集経等を例示し、このままでは、残る一つの難、他国侵逼、即ち、外国から攻められる。その相手は中国（蒙古）と達見していた。

なぜ天変地異が起こるのか、信仰と政治が、神仏の意に適っていないから、神仏の厳しい裁きを受けているのだと為政者は反省すべきだと、国内の事情を一々述べている。当時、鎌倉幕府の必死の努力と、神風が、日本を救ったことは歴史が示している。

ダライ・ラマの祈りは、チベットの民衆や仏教徒の信仰を守れとの主張である。

その及ぼす結果は、神、仏に背く中国の、邪な政権への天の裁きを求めることになる。人心の悪化と、政治の腐敗を神、仏は許さない。

神仏は既に、中国に対して明らかな裁きを示している。その事例を示せば

一・中国の歴史始まって以来と言われる、**唐山の大地震**で、万を超える多くの死者。

二・本年の旧正月、五十年ぶりの**大雪**で、旅行者の足を止め、停電が続いた。非時風雨。

三・黄河の水が涸れ、水不足で食糧不足と**飢饉**が広がり。

四・**悪疫の流行**。数年前のサーズの流行は、世界に脅威を与え、本年また香港で、鳥インフルエンザが広まりつつある。

五・**毒餃子**の日本人への被害。中国政府は日本が原因と逆宣伝している。中国の輸出食品の警戒心は、世界的に拡散している。

六・コピー商品の氾濫、中国製品の**商業道德の無視**は、全世界から不信と嫌悪的。

中国に対する、ダライ・ラマの叫びを助け、期待に応えるのは日本の使命である。同じ仏教国であり、中国覇権の脅威の下に晒されていることは、日本も同様である。

過日、高村外相の好意ある忠告に、中国は「チベット問題は人権問題でも、民族・宗教問題でもない、中国の統一か、分裂かの問題だ。中国の内政問題であり、外国は干渉すべきではない、ダライ・ラマの目的は北京五輪の破壊だ」と中国代表は断じた。

中国二千年の歴史は、すべて権力政治で、人民の血の叫びに耳を貸さず、やがて易姓革命となり、天の裁きを迎えている。自壊叛逆と共に、更に大きな天変地異が下される。

### それでも内政干渉と言うのか

第二次大戦後、中国の毛沢東政権確立までのチベットは、遠い遠い異国であった。バングラデシュ、インド、ネパールの3カ国を通過しなければ、到達できない異民族国家だった。チベット制圧後、中共政権は、インド国内の約百五十キロを蹂躪して道路を造った。勝手に隣国に道路を造り、侵略したことで、中印紛争が起こったことは記憶に新しい。

かりに、今回来日した中国代表の弁解のように「チベット問題は、中国の統一か分裂かの問題だ、中国の内政問題であり、外国は干渉すべきではない」と信じているとすれば、中国自身が、信仰の自由も、言論の自由も封殺し、民衆の意志を示す、デモの人達を逮捕しなければ、国家の統一が保たれない、危険な国と内外に宣伝したことになる。

ダライ・ラマは、彼等の意図を痛い程承知しているからこそ、チベット僧侶に犠牲が及ばないようにと、敢えて、チベット独立の言明を避け、また、北京オリンピックを主催する中国を擁護し、穏健な表現を用いている。

この姿は、印度独立の父、ガンジーに似ている。だが政治的配慮は、相手による。当時のガンジーの相手国イギリスと、今日の中国とは、全く政治体制が異なっている。中国の権力者が五十余年前、武力侵攻によってチベットを占領し、信仰と言論の自由を圧殺して今日に至り、そして、現在ますます強圧に出ている。

ここまでくれば、ダライ・ラマは、「チベットは独立する。そして中国には、北京オリンピックを主催する資格はない」と、内外に宣言すべきではないか。毛沢東と鄧小平の両政権が、如何にしてチベットを侵略したかは、世界各国は承知しているはずだから。

### 国家在っての宗教

七百年前の日本は、日蓮が必死の提言を行ない、中国の侵攻(蒙古来襲)に対して、北条時宗が立ち上がり、国運を懸けた態勢を執ったからこそ、天佑、神助を得た。自らが立ち上がらなければ、天佑も神助も頼れない。

「先ず国家を祈って仏法を立つべし、国亡び人滅せば、誰か仏を崇むべき、誰か仏法を信ずべけんや」当時、日蓮の(立正安国論)による必死の叫びであった。

アジアの国々は、北京オリンピックを控えて、中国の、常識を逸脱した圧政を見せ付けられ、心を痛めている。そして、軍事力増大の脅威に、恐怖と怒りを募らせている。

チベットの悲劇は、やがて明日の台湾の悲劇と直結しているとみるべきである。それでことは終らない。黙視すれば、日本に対して、「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」この日本国憲法に対比して、公正と信義どころか、「詭弁も嘘も」堂々と述べて恥じないのが今日の中国政権である。

中国政権は、その権力維持の為に、嘘を交えた宣伝で人民を翻弄し、圧政の原因と不満の捌け口を、日本と、米国と、ダライ・ラマ、に仕向けている。

中国政権の、圧政と悪政に対する人民の不満に対処して、中国の国家そのものが被害者だと、仮想の敵を仕立て、人民大衆の団結に狂奔している。

いつまでこの嘘がまかり通るのか。既に天変地異の現象が、前述の如く中国全土に現れている。「易姓革命」こそ中国の歴史であったことを、胡錦濤は知らないのであろうか。

聖火リレーに対する妨害は、その前ぶれと気付くべきである。

オリンピック不参加ならまだしも、その資格のない国中国に対して、何れの国も、開催に反対しないことが、「逆に恐ろしい結果」となりはしないか。

世界の国々から、北京へ訪れる人達は選手だけではない。多くの観客に加え、各国の報道陣が中国の実情を全世界に報道する。それは競技のみではない。

中国政権当事者は、観客や報道陣をも取り締まることが出来るのか。そして僅かの期間といえども、報道管制によって、中国人民の耳と、口と、眼を塞ぐことは容易ではない。

この世紀のイベントに対して、飽くまでも強欲な中国は、米国を中心に、世界の巨大企業から、莫大なスポンサー料、即ち広告料を集めている。

米国などは、オリンピックの中止を宣言できない。この広告料のため、圧倒的多数の国会議員の反対にもかかわらず、米国大統領ブッシュも、開会式への欠席を言い出しかねている、とみるが失礼か。国威発揚と広告費稼ぎの国が中国だ。

皮肉なことは、巨大な広告料を、今日となつては、まさかの悪役にかけてしまった。宣伝する企業は、悪役に応援したことになる。

ならばこつそりと宣伝するのか。大々的に、自分達の商品の為にかけた広告費を。

### 調和の旅、混乱の旅

天変地異が、失政に対する天の警声だと叫び、他国侵逼、即ち蒙古来襲の警告に対し、世を乱す者として、日蓮を首の座に送り、また、佐渡流罪とした北条幕府であった。

「文永の役」を迎えることによって、執権北条時宗は漸くめざめ、日蓮を赦免し、愛染堂別当職（宗教庁長官）に迎え、その上、一千町歩の良田を寄進したいと申し出た。

日蓮は法華経の一行者であり、政権に携わるつもりはない。執権時宗に法華経の信仰をすすめ国防の要を説き仏法に説く慈悲の治政に徹せよ、と潔く官位を辞した。

日本を救ったのは、日蓮の提言を容れた北条時宗の潔さ、そして死罪の人を、逆に政権の座に迎え、莫大な寄進を申し出た、救国、愛国の権力者に対して、神はこの人、この国を、護らないはずはない。かくて、神風が、敵を襲い日本国を護った。「弘安の役」。

中国の胡錦濤に、北条時宗の如き魂が在るのか。当時の国難と比べられる時が来た。

ダライ・ラマ活仏もまた、日蓮聖人の魂の再来の如く、中国人民の為、神風によって、狂暴の権力者を改心させ、アジア安定の治世に、変貌させることが出来るのだろうか。

媚中大国と仇名された福田首相も、たとえ形式的にせよ「世界の世論に耳を傾けよ」と中国の代表者に、言わざるを得なくなった。

二十六日、日本に於ける聖火ランナーの出发点と予定した、長野の善光寺も、出发点の辞退を宣言し、仏教王国と自負する日本人の、心と魂の故郷らしい行動を示した。

中国の抱える不安は、調和から混乱へ、自壊叛逆の乱（易姓革命）の狼煙とみる。その大混乱が迫る時、波及と被害を大きく受けるのは、日本の経済界である。

資本の相当部分を、中国各地に注入している各企業は、混乱の渦中へと巻き込まれる、責任者はその対処と方法を真剣に考えているのだろうか。

平成二十年五月上旬